

# 大学生の異なる主題に対する意見変容の差異

—「ペーパーレス」と「同性婚」の場合について—

二ノ神 正路・奴田原 諭・鈴木 賢男

## A Comparison of Opinion Changes for Two Topics in University Students:

On Paperless and Same-Sex Marriage

Masamichi Ninokami, Satoshi Nutahara, Masao Suzuki

In this study, we researched opinion changes about two topics by the questionnaire method. One topic was “paperless”, and another was “Same-sex marriage”. The subjects were 130 university students.

The results showed the following three points:

First, about a shift to paperless, opinions were divided into agreement and disagreement, and there was a possibility of opinion changes. However, about acceptance of same-sex marriage, most opinions inclined to agreement, and there was the impossibility of opinion changes.

Second, In the case of “Same-sex marriage”, female college students were more agreeable than males, and subjects who have had experiences of behavior by believing fortune-telling were more agreeable too, compared to those with none of these experiences. However, in the case of “Paperless”, the difference of agreement degrees was not significant between these attributes, instead the difference of opinion change degree was significant between them in specific scenes of describing opposite opinions. Those scenes described opposite opinions shown by persons with a sense of closeness, and expressed by celebrities on TV programs.

Third, subjects who had a tendency to be sometimes confused, which is one of the factors in “Trait anxiety” from STAI (State-Trait Anxiety Inventory; Hidano et al., 2000), had more possibility of opinion changes in spite of the topics or the scenes of describing opposite opinions.

Moreover, in analysis of free writing about the most strongly experienced of opinion changes in one's life, we could see that there were few experiences where the view and way of life turned 180 degrees in subjects. Paradoxically, this may be due to the times and characteristics that had less opportunity when opinion changes have required decreases in persuasive communication.

## はじめに

ある事象・話題に対して、個人がなんらかの意見（主義・主張・考え）を持つというのは、ごく当たり前のことであろう。「朝食を食べない方が、体にいい」という個的に関わるものから、「環太平洋パートナーシップ（TPP）には、積極的に参加していくべき」といった社会的・国際的な問題に至るまで、我々の生活には常に「意見を持つこと」がつきまとう。そして、我々はその持ち得た意見を他者に表明し、あるいは他者と交換することで、その事象・話題に対する自らの態度を定めている。

しかしながら、意見というものは決して強固なものではなく、人によつては容易に変化する。たとえば、昨日まで「朝食を食べない方が、体にいい」と言っていた友人が、今日になってみると「朝食を食べた方が、体にいい」とまったく逆のことを言い出す、こんな経験をしたことはないだろうか。この時、この友人の心理的変化の要因を推察すると、次のようなことが前日に起こったのかもしれない。テレビ番組で医師が「食べた方がいい」と言っていたのを見た、WHO（世界保健機構）でそのような発表があった、朝食を食べている知人から勧められた、周りのみんなが朝食は食べた方が体にいいというから……。これらの中の何かがその友人の考えを変えたと想定しうるわけだが、このとき、友人の心境を変化させたというこの現象は、どのように捉えることができるのであろうか。

「意見変容」に関わる研究はその多くが心理学の分野で見られ、解釈可能性の多い話題（話題が不明瞭である）の方が、唱導方向に個人の意見が変化しやすい、ということを示した実験（原岡, 1970）、説得的コミュニケーションの送り手と受け手の意見の食い違いが意見変容に与える効果を扱った研究（榎, 1984a, 1984b）などがある。また教育学の分

野では、映像教材（TV）が大学生の意見変容にどのような効果を与えるかを扱った研究（倉島, 1979）などが見られるが、榊の研究を除くと「意見変容」の送り手側に焦点が当てられ、受け手側にはあまり目が向けられていない。

あるいは、心理学において「意見変容」は「態度変容」や「説得研究」と題した研究に含まれるものとして扱われる場合も多いが、これらの研究においては、恐怖コミュニケーション<sup>1</sup>における恐怖喚起の程度が受け手の性別や不安傾向に与える影響を分析した研究（深田, 1973）、自由への脅威の大きさと受け手の独自性<sup>2</sup>が心理的リアクタンス（人が自分の自由を外部から脅かされた時に生じる、自由を回復しようとする動機的状态のこと）に及ぼす影響を検討した研究（上野, 1986）など、受け手側のパーソナリティに焦点を当てた研究は見られるもののその数は多いものとは言えない。また、不安と態度変容の過程では、感情的側面と認知的側面の不均衡が不安を形成し、数回の情報提示による不安の喚起によって態度変容の可能性を高めることが明らかにされている（原岡, 1963）が、個人が持つ不安特性（不安になりやすい性質）と態度変容との関連を直接説明するものとはなっていない。

## 目 的

本稿は大学生を対象に行ったアンケート調査の結果から「意見変容」について検討する。今回の調査では、「ペーパーレス」と「同性婚」という二つの主題を取り上げた。この二つは、現代社会において、今まさに目の前で変化が生じている問題である。このような話題性のある主題を提示することで、意見表明に対する現実感を喚起することができると考えられ、さらに現実感のある社会問題としては共通するものの、一方では物的な現象である「ペーパーレス」、他方では人的な現象である

「同性婚」を提示することで、評価する問題に物と人という対極的な差異を設けることができるというのが、主題として選定した理由である。そして、これによる意見表明や意見変容への影響の違いについて調べることを目的の一つとした。

また、意見表明や意見変容は、「問題を解く」というような純粋な思考ではなく、他者との間である考えを表したり、変えたりすることへのバイアスのかかり方を問題としており、送り手側と受け手側の双方の要因が考えられることになる。一つは、送り手側として、どのような伝え方をするかが問題となるので、大学生が体験しやすい実際上の伝えられ方の場面を想定し、これによる意見表明や意見変容への影響の違いを調べることにした。そして、受け手側の受け取り方の問題もあり、特に、受け手が比較的直感的に回答を求められるような短い時間の場面ともなると、受け手の生物学的、社会的属性や生活習慣、生活感覚の違いによる影響が考えられたので、これを明らかにすることにした。さらには、受け手が有する心理特性については、不安の喚起と意見変容との関連性が指摘されていることから、対象者の特性不安（不安傾向）を調べることで、不安が喚起されているわけではないが、もともと不安に陥りやすい傾向にあると、意見表明や意見変容にどのように作用するのかを調べることにした。

なお、質問紙調査法（心理学）による手続きと分析方法を用いた結果を得て考察を加えたが、「意見を変える」とする表現上の意味を、調査対象者の自由記述から改めて問い直し、「意見変容」として調べられた本調査の内容を批評（文学）的に検討することで、「意見変容」の概念までも含めた広い意味での研究内容の妥当性を追究することも目的とした。

## 方 法

### 1. 調査質問紙

質問紙の冒頭では、調査対象者の属性や生活感覚（生活観）や生活態度における一端を調べておくために、A 1. 性別や A 2. 所属学科、A 3. 学年を始めとして、次の設問を行った。A 4. 「友人と出かける休日のランチには幾らぐらいまでなら払ってもいいですか」や A 5. 「四半期（3 か月）で、何冊くらいの本を読みましたか」、A 6. 「1 日に Twitter などの SNS サービスを何時間くらい利用しますか」について実数で回答してもらい、A 7. 「最近、3 か月以上継続したアルバイトがありますか」と、A 8. 「占いやおみくじを信じて行動してみたことがありますか」、A 9. 「何かのクラブに所属し、定期的に団体活動をしていますか」に関しては、はい・いいえの強制選択法で回答してもらった。また、A 10. 「流行には敏感な方ですか。それとも、鈍感な方ですか」と A 11. 「安売りには敏感な方ですか。それとも、鈍感な方ですか」では、敏感・普通・鈍感の三つの選択肢による強制選択法で回答してもらった。

次に、同一の調査対象者において、異なる二つの主題に関する意見を求めるために、次のような教示のもとに回答を得た。

【ペーパーレス】を主題とした設問の場合

「高度な情報技術の進展に伴い、私たちが慣れ親しんできた生活が急速に変化してきています。学校生活においても、その例にもれず、教科書や配布資料の電子化を推進することが可能な状況になってきました。いわゆる「ペーパーレス」化です。これには、紙の教材を極力減らしていくべきだとする意見と、紙の教材を極力残していくべきだとする両方の意見があります。以下、このことに関する幾つかの質問に回答をお願いいたします。」と教示した後、「あなたは、教材の「ペーパーレス」を推進すべきだとする考えに賛同できますか。」に対して、「全く賛同でき

る」から「全く賛同できない」までを6件法によって、また、「改めてお聞きします。教材の「ペーパーレス」についてどちらかと言えば」に対しては、賛成か反対のどちらかの強制選択法によって、回答を得た。

#### 【同性婚】を主題とした場合の設問

「最近では、人には幾つかの面で多様性があることがわかってきましたが、社会的環境下では、法律的にも、容易にそれが認められない場合もあります。同性婚はその一例ですが、最近では、条例の枠内で、結婚に相当する「パートナー」として証明証を発行し、地方行政におけるサービス等を受けられる地区も出てきました。これは、実質的な「同性婚」の認知の始まりとも言えます。以下、このことに関する幾つかの質問に回答をお願いいたします。」と教示した後、「あなたは、「同性婚」の認知を推進すべきだとする考えに賛同できますか。」に対して、「全く賛同できる」から「全く賛同できない」までを6件法によって、また、「改めてお聞きします。「同性婚」の認知についてどちらかと言えば」に対しては、賛成か反対のどちらかの強制選択法によって、回答を得た。

さらに、それぞれの主題で賛否について回答してもらった後には、「以下の状況で、あなたとは逆の意見が表明された場合に対し、あなたは、自分の意見をどの程度撤回し、考えを改めたほうがいいと思いますか。」という教示を提示し、逆の意見が表明された場合として「親または保護者の見解」や「国連機関におけるデータの公表」などの36項目の提示場面に対して、「全面的に改める」から「全く改めない」までの4件法で回答をしてもらった。

次に、回答の賛否の程度や意見を改める程度と常態として感じている不安との関連を調べるために、新版STAI Y-2（肥田野他, 2000）より問番号21～40の20項目にわたる特性不安に関する項目を用い、ランダムに配置しなおした上で、「ほとんどいつも」「たびたびある」「ときど

きある」「ほとんどない」の4件法で回答を得た。また、変化（変わっていくこと）に対する感情的なイメージとの関連も調べるために、「変化」と10の漢字一字による感情語（恐，喜，驚，好，悲，幸，望，嫌，怒，愛）を対提示して、「変化を一般的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が、「近いもの」であるか、「遠いもの」であるか、そのびったりする感覚」を5件法で回答してもらった。

最後に、意見変容に関する調査対象者の実感を調べるために、自由記述法で次のように教示した。「最後にお聞きます。あなたの体験談をお聞かせください。今までの生活の中で、自分の意見が大きく変わったことがありますか？是非、その時のことを思い出していただいて、何才頃のことなのか、どのような状況における出来事だったのかを記述してください。お願いいたします。」

## 2. 調査対象

対象者は、人文系大学文学部の130名の大学生であり、男性44名（33.8%）、女性86名（66.2%）であった。そのうち、日本語日本文学科の学生は61名（47.3%）で男性15名、女性46名、英米語英米文学科の学生は24名（18.6%）で男性10名、女性14名、中国語中国文学科の学生44名（34.1%）では、男性19名、女性25名となっていた。なお、所属学科に関しては、1名（女性）が無回答であった。平均年齢は、男性が19.3才（ $SD=1.64$ ）、女性が18.8才（ $SD=0.81$ ）で、全体では18.9才（ $SD=1.19$ ）であった。学年に関しては、1年生が89名（70.6%）、2年生が29名（23.0%）、3年生が6名（4.8%）、4年生が2名（1.6%）で、不明が4名であった。

### 3. 手続き

質問紙は、著者のうちの一人が担当した科目を履修している学生に対して、2015年7月22日～24日の期間で、調査の趣旨を口頭で説明した後、一斉に配布し、その場で回答・回収を行った。

## 結 果

### 1. 二つの主題における賛否

「ペーパーレス」を主題とした設問には、教材の「ペーパーレス」を推進すべきだとする考えに賛同できるとする6段階評定の平均は3.3 ( $SD=1.05$ ) であり、「同性婚」を主題とした設問では、「同性婚」の認知を推進すべきだとする考えに賛同できるとする平均は4.5 ( $SD=1.22$ ) であった。対応のある平均値の差の検定を実施した結果、有意であることが認められ ( $t = -8.168, df = 118, p < .001$ )、母集団においては「ペーパーレス」よりも「同性婚」における賛成度の方が、高いことがわかった。

また、賛成か反対かを強制選択させた設問について、賛否における単純集計をして、頻度の偏りの検定を実施した結果、無回答13名を除く「ペーパーレス」の推進に賛成する対象者は、47名 (40.2%)、反対する者は70名 (59.8%) であり、有意に反対するものが多いことを認めることとなった ( $\chi^2 = 4.521, df = 1, p < .05$ )。一方、「同性婚」の認知の推進に関しても同様に検定し、無回答14名を除いて、賛成する対象者は99名 (85.3%)、反対する者は17名 (14.7%) となり、有意に賛成するものが多いことを認める結果となった ( $\chi^2 = 57.966, df = 1, p < .001$ )。

さらに、以上の評定値に関して、属性および生活習慣・生活感覚別に、平均値の差の検定 ( $t$  検定) をしたところ、有意であると認められたものは、「同性婚」の認知の推進を主題とした場合、「性別」と「占いやお

みくじを信じて行動してみたことがありますか」であった。性別では男性4.1 ( $SD=1.34$ )、女性4.7 ( $SD=1.12$ ) で、女性の方が、有意に賛成度が高いことを示し ( $t = -2.613$ ,  $df=117$ ,  $p<.05$ )、「占いやおみくじを信じて行動してみたことがありますか」に対して、「ある」とした対象者の平均値は4.7 ( $SD=1.13$ )、「ない」とした対象者では4.2 ( $SD=1.29$ ) で、占いやおみくじを信じて行動してみたことがある人の方が、有意に賛成度が高いことを示した ( $t=2.500$ ,  $df=116$ ,  $p<.05$ )。「ペーパーレス」主題では、平均値の差の検定 ( $t$  検定) によって、有意傾向とされたものが、「何かのクラブに所属し、定期的に団体活動をしていますか」のみであった。この設問に対して、「団体活動をしている」とした対象者の平均値は3.2 ( $SD=1.09$ )、「団体活動をしていない」とした対象者は3.6 ( $SD=0.93$ ) で、団体活動をしていない人の方が、有意傾向程度に賛成度が高いことを示した ( $t = -1.698$ ,  $df=118$ ,  $p<.10$ )。

## 2. 意見を変更する可能性

分析方法：二つの主題である「ペーパーレス」「同性婚」のそれぞれについて、逆の意見が表明された場合に、自身の意見を変更するかどうかを聞いた36項目の提示場面に対する回答を、縦260 ( $130 \times 2$ )  $\times$  横36の行列に再構成し、主題の相違によらない場面項目の因子分析を実施した (Table 1)。抽出方法として最尤法を用い、固有値の減衰率 (スクリー基準) に従って2因子を抽出した後、回転バリマックス解を得た (累積寄与率57.2%)。因子負荷量の高い項目に着目すると、一方の因子 ( $F1$ ) は、種々の「データの公表」や「公式見解」によって構成されており、公に向けて、職務上もしくは職業上の責任の上で表明される場面を表すものとして、因子名を「公的表明場面」と命名することができ、他方の因子 ( $F2$ ) は、TV番組でのコメントや身近な人の意見などに



また、上記の因子分析に基づいて、各項目は、因子負荷量の高い方の因子に属する項目として分類され、それぞれに再度、因子分析を実施した。「公的表明場面」に属する17項目に対して、最尤法を用いて、固有値1.0以上（カイザー基準）に従って2因子を抽出した後、回転バリマックス解を得た（累積寄与率62.9%）。続いて、「私的表明場面」に属する19項目に対して、同様に最尤法を用いて、カイザー基準に従って3因子を抽出し、回転バリマックス解を算出した（累積寄与率62.6%）。

「公的表明場面」17項目の2因子は、一方の因子（ $F1f1$ ）では、種々のメディアの「特集」や関連機関の「見解」によって構成されており、時間をかけた重厚な手続きや専門的な見識に基づいて提示された表明を表している場面と考えられ、因子名を「信用提示」とした。他方の因子（ $F1f2$ ）は、それぞれ「データ」であることの共通点より、しかるべき手続きで集められた客観化された数字に基づく表明を表している場面と考えられ、因子名を「客観提示」とした。

「私的表明場面」19項目の3因子は、一方の因子（ $F2f1$ ）で、「授業内」での多数意見や「所属機関」の教員や大学院生の見解・助言、さらに「雑談」における友人や恋人の熱弁などの身近な人における表明を表している場面と考えられ、因子名を「親近提示」とした。他方の因子（ $F2f2$ ）は、TV番組での識者等の「コメント」、同世代の著名人やベストセラー作家などの、馴染ではないが比較的良好に知られている人における表明を表している場面と考えられ、因子名を「話題提示」とした。最後の因子（ $F2f3$ ）は、交通機関や飲食店、インターネット上におけるフェイスブックやツイッターと、一定の空間で、しかも周囲に対しては比較的匿名的な状態で、複数の人間がそれぞれ意見を表明し、それが集中的、集合的に現れている場面と考えられ、因子名を「集合提示」とした。













は $r=.24$ となり、これも、いずれも1%水準で有意な正の相関となっていた。従って、不安要素の一部である「非平静感」と意見の変容可能性に関しては、「ペーパーレス」と「同性婚」の両方とも、各場面間、またその強さの程度に関しても、同程度の正の相関係数が得られ、主題による差異が生じていないことがわかった。

最後に、心理特性の形成、あるいは反映に関連が強いと思われる生活習慣との関連で、「1日にTwitterなどのSNSサービスを何時間くらい利用しますか」の設問に対する「何時間」という回答に対して、「ペーパーレス」「同性婚」それぞれの意見の変容可能性の全体（信用・客観・親近・話題・集合）とに有意な正の相関が確認され、前者では $r=.18$  ( $p<.05$ )、後者では $r=.18$  ( $p<.05$ ) となっていた。

## 考 察

### 1. 主題の相違にみる意見表明と変容

結果1で確認した意見表明（賛否の程度）と結果2での意見変容の可能性についての主要な結果を、グラフ化してFigure 1に示した。「ペーパーレス」と「同性婚」の賛成度の平均値には有意差があり、6段階評価の中位数3.5を下回ったのが「ペーパーレス」で、上回ったのが「同性婚」であった。従って、「同性婚」という主題の方が、賛成はされやすく、「ペーパーレス」は比較的反対されやすくなっていることが確認できた。このことは、改めて賛否による二者択一を問うた設問の集計結果とも符合していた。これらの主題は、時代性を表す現代的なトピックスとしては共通していながら、「ペーパーレス」では技術の進歩に伴う利便性が問われ、「同性婚」では性意識におけるリベラルな理解に基づく倫理性が問われているところが特徴的な違いになっていると思われるので、上記の結果は、「ペーパーレス」のような利便性に関する問題に



従って、前述の仮定を適用すれば、利便性に関する問題に対しては、賛否の分かれる意見表明がされやすくなると同時に、「信用提示」や「親近提示」などの一定の関係性のもとに、信頼のおける個人や機関による反対意見の表明があれば、意見変容の可能性もあることにはなるが、倫理性に関する問題に対しては、ほとんどが賛成の意見表明がなされたまま、いずれの場面における反対意見の表明があっても、意見変容の可能性は一様に低くなることを予見しうるものとなった。ここでは、このように、主題による意見表明や意見変容の差異が生ずることを、意見判断における「主題効果」と仮説的に提起しておきたい。本研究では、二つの主題を比較することで、利便性と倫理性という特徴を見出したが、これによらない主題効果にはどのようなものが考えられ、意見表明や意見変容にどのような違いが見られるのかは、課題として残されることになった。

## 2. 生活感覚（生活観）による意見判断への作用

結果1で有意差を認められた「同性婚」を主題とした場合の、属性および生活感覚（生活観）による賛成度の平均値の差を、Figure 2にグラフで示した。有意差が認められたものは、属性では性別、生活感覚（生活観）では「占いやおみくじを信じて行動したことがあるか」に該当するかどうかの二つのみであった。

これによると、賛成度の高かった「同性婚」ではあったが、その中でも、女性が男性より、占いやおみくじを信じて行動したことがある人の方がいない人よりも、「同性婚」への賛成度が高くなることが明らかとなった。前述で、「同性婚」が倫理性の高い問題であると仮定できることを述べたが、こうした問題は、歴史的な重圧や無理解を経た上での当事者の切望を表わすものでもあり、またそれを踏まえた上で「個人の価値

値観を認めることは当たり前だ」というような強い論調で語られることも多く、念願の達成、結論の正当性のみが比較的印象に残りやすい面があると思われるので、思いの強さに同調して意見表明をしやすい人がいることを、また、同調しやすい生活感覚（生活観）を有している人がいることを、表しているのではないだろうか。ここでは、このことを意見表明における「同調効果」と仮説的に提起したい。本研究では、同調しやすい生活感覚（生活観）として、「占いやおみくじを信じて行動する」感覚と女性としての何かしらの生活感覚が同調効果として作用する可能性が高く、個人の権利を尊重するような倫理性の高い問題に対しては、賛成に同調する傾向にあることを示唆したことになった。

また、この「同調効果」は、結果2で有意差を認められた「ペーパーレス」を主題とした場合の、意見変容の可能性における平均値の差にも当てはめて考えることができる。前述の「同性婚」における賛成度（意見表明）の場合と同様、属性および生活感覚（生活観）による有意差が認められているからである。これについてはFigure 3に表した。

これによると、「同性婚」の場合と同様ではあるが、今度は、賛否ではなく、意見変容の可能性の面について差があることがわかり、女性が男性より、身近な人の間から生じた「親近提示」による意見変容の可能性が高いこと、「占いやおみくじを信じて行動したこと」がある人がない人より、著名人がテレビ等で取り上げたことから生じた「話題提示」による意見変容の可能性が高くなっており、「同性婚」における賛成度の差異を見出した際と同じ属性、同じ生活感覚（生活観）が同方向に作用していることが示唆されるものとなった。従って、「同調効果」は意見表明におけるものだけではなく、特定の場面下にはなるが、意見変容においても提起できる仮説になりうるものが窺われるものとなった。つまり、倫理性に関する主題に対しては、その時点で一定の生活感覚（生



女性的な生活感覚の高さが「同調効果」を働かせ、「話題提示」による逆の意見の提示では、占いやおみくじを信じて行動したことがあるような生活感覚のある人に「同調効果」が表れると考えてよいだろう。

おそらく、この場合、逆の意見が提示される場面が「親近」や「話題」のように個人の気持ちも含めて語られる場面を示しており、倫理性に関する賛成度（意見表明）と同様に、切望や思いの強さを感じることで、同様な効果が働いたと言えるかもしれない。

### 3. 情動的な心理特性による意見判断への作用

結果3においては、不安の要素の一つとして仮定した「非平静性」は、頭の中に多くのことが浮かんできたり、いろいろなことを考えてしまうという比較的軽度ではあるだろうが一種の混乱状態になっていることを表わしており、こうした傾向の強い人が、意見の変更の可能性が高くなるという相関関係が示唆された。また、主題の相違である「ペーパーレス」や「同性婚」でも、意見変容の場面となる「信用提示」「客観提示」「親近提示」「話題提示」「集合提示」の全てにおいても、同様な相関関係は認められ、しかも、その相関が一律に同程度であることが示された。

従って、特性不安の一要素としての情動的傾向が、逆の意見が表明された場合に、主題や提示場面の如何を問わずに、一律に、全体的に作用することが予見されと考え、これを、意見変容における「波及効果」と仮説的に提起してみることにした。ただし、意見表明における賛成度には「非平静性」が関連性を示さなかったことで、この効果は、意見判断全体に対して敷衍されるものとはならない。あくまでも、自分が一定の意見をもったうえで、その後、逆の意見が提示された場合におけるものとなる。このことは、逆の意見が提示されるという場面がきっかけとなって、認知的な面での安定状態から不安定状態への移行を促し、結

果として、「非平静性」のような情動を賦活することを意味しているものと思われた。

さらに、感情そのもの、不安そのものではないが、心理的反応の形成あるいは反映に関連が強いと思われるものに、生活習慣があげられると思われるが、本研究では、その一つである「1日にTwitterなどのSNSサービスを何時間くらい利用しますか」という項目が、意見変容の可能性との間に、弱い相関ではあるが、有意な正の相関が認められた。従って、SNSの利用時間が長い人ほど、意見変容の可能性が全般的に高くなることが一定程度窺われることになったわけだが、このことは、次のような示唆的な意味を持っているものと思われる。長時間にわたるこれらのサービスの利用によって、たとえば、拡散的であるとか、思いがけない話題の展開などにさらされていると、認知的に不安定な状態になる機会に遭遇しやすくなり、「非平静性」と同様な傾向が一時的にせよ高まり、意見変容の可能性を強めることがあるのかもしれない。

以上の考察で提起した仮説は、それぞれ、多様な条件において、既に多くの研究で確認されたことではあるが、本研究における反対意見の提示場面による相違、かつ、意見表明と意見変容との対比について、これを複合的に見た場合、結果に関して類似した効果があったのではないかと考え、統合的に提示したものである。そして、これらの効果が、全般的ではなく、場合に依じて、選択的に生じていたことが特徴的であると、考えている。

### 自由記述について

今回の調査の中、最後の項目として自由記述による回答を求めた。自分の意見を変えたこと、それにまつわる体験談を尋ねたのだが、130名



関して、賛成派の人の意見を聞いたら私も賛成派に変わりつつあった。  
(10)」

これらを見れば、それぞれに変容を促したものがその外形ではなく、中身そのものであったことを指摘できるかもしれない。「賛成派」の意見は回答者の意見変容を促すだけの内容を持っていたのだろう。しかし、ここで気になるのは「反対派だと思っていた」という、その思いの度合いだ。意見を変える、翻すということの重みである。

吉本隆明『マチウ書試論・転向論』（1990年 講談社文芸文庫）の「作家案内」冒頭で梶木剛はその読書体験を以下の様に記している。

「わたくしにとって、吉本隆明の「芥川竜之介の死」と「転向論」との衝撃は甚大であった。大袈裟でも何でもなく、それは人生的な衝撃と言ってもいいものだった。それまで、善として目指そうとしていたもの、あるいは、悪として忌避しようとしていたものが、それらの作品に接することによって引っ繰り返り、明らかに人生的な価値観の変更を強いられなければならないかった」

梶木の中で積極的に形作られていたであろう善、拒否すべきものとして已れに課されていた悪、それが「引っ繰り返り」されることは何気なく口にできることではない。意見を変容するということは尋常ならざることなのだ。だからこそ、「転向」そのものを経験した者だけでなく、多くの文学者も「転向」を問題としなければならないかった。右でなければ左、左を捨てて右を採る。二者択一、翻すとはそういうことだ——。そしてこれが我々の、少なくとも私個人の中における「自分の意見が大きく変わったこと」として問うたことの中身であった。それに比して、回答として得られた文章の中身は如何にも軽い。もちろん、事の軽重は客観的な場所からのみ測られるべきではない。その者、その場所、その時間における重みこそが問題だ。子どもにとってのおもちゃが、大人に

としての恋人と同じ重みで測られねばならない時もある。しかし、である。

書かれた事柄とは二重の時制の中で考えられねばならない。体験時の時制と、その体験を執筆するその時である。故に、書かれることは自ずからして客観性を持たざるを得ない。10歳の私は19歳の私によって、書くという行為を通して相対化されるのだ。10歳の私の選択は19歳の私によって捉えられ、19歳の私として表明される。体験こそ10歳当時のものであったとしても、それを変容として認識し、変容として表明するのは19歳の「私」なのだ。そのことを考えた時、`意見を<sup>レ</sup>変えた私、が回答者にとってどの様に捉えられていたのかを思わずにはいられないのである。果たしてこれは意見変容として記すべき事柄であるのか——、その逡巡があったのかどうかを疑いたくなるような回答の軽み。その軽みは意見変容の容易さを物語り、いや、容易さだけではない、変容の経験そのものの有無をも疑問視させるに十分な文章表現となってしまう。回答を引用するに際して、「影響<sup>レ</sup>を受けたと答えたもの」と記した理由はここにある。体験として、私が思う重みを伴った文章はここにはない。

体験は年齢との関係の中で考慮されねばならない、既に記したこのことが、回答の中に窺える軽さに影響していることは間違いあるまいが、調査対象設定の不備としてこれは片づけてよいものなのか。調査データ、或いは現代社会の様相と突き合わせて考えてみたいものと思う。

おわりに

ここまで、大学生を対象に行った異なる二つの主題（「ペーパーレス」「同性婚」）についての調査結果を示すとともに、考察について述べた。考察からは、意見表明や意見変容に関する三つの仮説を導き出すことができたわけだが、最後にこの三つの仮説について検討したい。

第一の仮説として提案した「主題効果」については、前述したとおり、「利便性」「倫理性」という特徴を持つ主題以外にどのような性質を持つ主題を設定しうるかが課題として残った。また、原岡（1970）では、「抽象的」「具体的」といった話題の「明瞭性」に指標をおいた実験のほかに、話題と個人との関係の強さ、「関心の度合い」を一つの指標として用いた実験もなされており、ここには「主題と個人との関係性」という観点から「主題効果」についても検討する意義があるものと考えられ、この点も課題に加えておく必要がある。

第二の仮説として提案した「同調効果」は、「ペーパーレス」と「同性婚」の両主題において、「女性」と「占いやおみくじを信じて行動したことがあると答えた人」で有意に高い平均値を示したことから考え出されたが、この同調という現象が主題の違いによって、「ペーパーレス」では、特定の反対意見の提示場面における「意見変容」の過程で現れ、「同性婚」では「意見表明」という過程で現れたことは興味深いことであった。「女性」と「占い～」で高い平均値を示したということから考えると、「同調」においてはこの二つになんらかの関連性を見出すこともできそうだが、あるいは、これらがまったく別の傾向と結びつく可能性はないのか、検討する必要があるだろう。

第三の仮説として提案した「波及効果」については、特性不安の要素の一つである「非平静性」と「SNSの利用頻度が高い人ほど意見変容の可能性が高くなる」の関連性について、さらに詳しい検証を行いたい。SNSの利用時間が長いというのは、こういった心情から起こりうる行為なのか、あるいは、SNSの利用時間が長い人ほどこういった目的での利用が多いのか、考えていくべき課題である。

また、上記以外に自由記述の結果からは、「意見を変える」という行為が大学生にとってあまり重みを持つものではないといった様子を窺え

たことも示唆的なものであったと言える。「意見を変える」ということが世代によってどのような意味を持つものとなるのか。現時点では本研究における位置づけとして明確なものとはなっていないが、世代間調査から意見変容を捉えていくという、一つの方向性をここに見出すことはできるのではないだろうか。

「はじめに」で一例として述べた「朝食を食べた方が、体にいいとまったく逆のことを言い出す友人」というこの現象はどのように捉えることができるのか。

「朝食を食べた方が～」は、医学的にも「食べる派」「食べない派」に分かれるものではっきりと結論の出ていない話題であり、主題の性質として「ペーパーレス」に近いものと捉えることができる。すると賛否が分かれるものであったが、だからこそ、意見変容が起こりやすかったとも言える。さらにこの捉え方でいけば、「主題効果」として身近な人の間から生じた「親近提示」や著名人がテレビ等で取り上げたことから生じた「話題提示」で、自分とは異なる意見を受けた結果の意見変容であったと考えられるが、この友人が「占いやおみくじを信じて行動する」ような性格でなければ、「同調効果」までは起こりえなかったとも考えることができるだろう。

意見が変わるという過程において、どのような人間がどのような要素に影響を大きく受けるのか。今回の調査においては、多くの示唆を含んだ結果を得られたと言えるが、それらはまだ可能性を示したに過ぎず、さらなる研究の必要性を明示するものであったとも言える。本稿において浮かび上がった課題を一つひとつ明確にし、より深度をもって「意見を変える」という現象を捉えたい。

## 注

- 1 深田（1973）によると恐怖コミュニケーションとは、「受け手に恐怖の情動を喚起することによって、送り手の勧告の受容を促進させようと意図された説得的コミュニケーション」であると言う。
- 2 上野（1986）は「人は周囲の他者と類似していることに価値を認める傾向がある一方で、周囲の他者とは違う自分の姿を追求しようとする傾向（human pursuit of difference）」があるとして、この「周囲の他者とは違う自分の姿を追求しようとする」ことを独自性と述べている。

## 参考、引用文献

- 上杉喬（1981）「感情イメージの研究」『人間科学研究』第3号, 22-38
- 上野徳美（1986）「自由への脅威と受け手の独自性がリアクティクス現象に及ぼす効果」『心理学研究』vol.57, No. 4, 228-234
- 倉島敬治（1979）「映像教材（TV）の意見変容効果についての分析的研究」『岩手大学教育学部附属教育工学センター教育工学研究』第1号, 1-8
- 斎藤和志（1992）「態度変容過程における自己決定」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第31号, 195-208
- 榊博文（1984a）「コミュニケーション・ディスクレパンシー及びコミュニケーションの唱導方向の意見変容に及ぼす効果」『三田学会雑誌』vol.77, No. 2, 149-162
- 榊博文（1984b）「コミュニケーション・ディスクレパンシーの意見変容及び信憑性評価変容に及ぼす効果—ブーメラン効果発生条件の分析を中心として—」『実験社会心理学研究』vol.24, 67-82
- 原岡一馬（1963）「態度変容過程と不安」『教育・社会心理学研究』第6

巻, 第 1 号

原岡一馬 (1970) 『態度変容の社会心理学』 金子書房

深田博己 (1973) 「恐怖喚起の程度、受け手の性および不安傾向が態度  
変容に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』 vol.13, No. 1, 40-54

肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・C.D.Spielberger (2000)  
『新版STAI』 実務教育出版